

長尾寺

長尾寺は天台宗の寺院で、四国八十八箇所巡礼の第 87 番札所となっています。その歴史は、739 年に行基（668–749 年）という僧侶が四国を巡る旅の途中で訪れたのが始まりとされています。また長尾寺は、四国巡礼の開祖とされる空海（774–835 年）との関わりも言われており、彼は若い頃、この場所で儀式を行ったあと中国に渡って密教を学んだと伝えられています。空海は帰国後、再び長尾寺を訪れ、境内を拡大しました。この寺に古くからあるお堂は、火災や戦災で失われ、現行の建物は、高松藩主の庇護を受けていた江戸時代（1603–1867 年）のもので、梵鐘が吊るされている正門は、1694 年に建てられたもので、境内に現存する最古の建造物のひとつです。

他の見所として、1913 年に高松の栗林公園から現在の場所に移築された東門や、多くの叙事詩や年代記に登場する悲劇の主人公、静御前（1165–1211 年）の碑などがあります。静御前は、武勇で名を馳せた武将であり、後に家族と袂を分かちお尋ね者となった、源義経（1159–1189 年）の愛妾でした。この恋人たちが追手から逃れるために別れた後、静御前とその母は長尾寺を訪れ、尼僧になることを決意したと言われています。静御前が決意を示すために剃り落とした髪は、碑の近くにある塚の下に埋められたと言われています。